

京都大学
平松文庫蔵

『和漢々和』翻刻と解題（上）

楊 昆鵬

現在残されている和漢聯句作品は多く、とりわけ室町時代から江戸時代前期にかけて創作された作品が豊富である。しかし、近年に至るまでそれが紹介されることは稀であった。昨年『^{書誌}和漢聯句作品集成』（京都大学国文学研究室中国文学研究室編・臨川書店・二〇〇八年三月）が刊行された。現在その続編として室町時代後期・安土桃山時代の作品を対象とする翻刻集が編輯されているところであり、将来的にそれは更に近世初期作品にも及ぶことと思われる。その補足と今後の備えとして、ここに京都大学附属図書館平松文庫に所蔵される『和漢々和』を翻刻する。本書は主に慶長から寛永年間にかけての和漢・漢和聯句百韻の十三点（文禄二年一点、年次不詳の六点を含む）を収録しており、和漢聯句の隆盛期とされる江戸初頭の作品の一斑を窺うに足る。今回はまず前半の七点日まで掲げ、後半と解題は次号に譲る。

《書誌》

京都大学附属図書館平松文庫蔵（平松一〇八）、京都大学電子図書館にて公開中。袋綴横本、五十三丁、縦十二・八cm×横二十・六cm。表紙に「和漢々和」と墨書する。虫損少々。所収作品は下記の通りである。

・元和二年正月十二日和漢聯句「梅さけは百木千草のかほり哉」

・元和二年二月八日和漢聯句「池になひく柳は風のうき藻哉」

・年次不詳漢和聯句「待鵬嫌夏浅」

・年次不詳和漢聯句「萩の葉にきくはかしや秋の声」

・年次不詳漢和聯句「竹密雪宜聴」

・元和三年正月二十一日和漢聯句「きくの千世やうち払ふ露の玉柳」

・文禄二年四月二十日（二十一日）和漢千句第六「孤円空裏

月」

- ・ 年次不詳漢和聯句「閑花天下白」
- ・ 年次不詳和漢聯句「冬さくや木のめもまたぬ園の梅」
- ・ 年次不詳漢和聯句「梅橋鶯進歩」
- ・ 慶長十一年十二月十七日和漢聯句「おしみみよ月の光に雪の窓」
- ・ 慶長八年十月二十五日漢和聯句「雨寒山半雪」
- ・ 寛永十五年十二月二十六日和漢聯句「君は千世さりともおしめ歳の暮」

〈凡例〉

- 一 【一】～【七】と百韻の順番を示し、各句に算用数字で通し番号を付した。
- 二 底本とする本書の外、百韻ごとに異本が存在し、それぞれの諸本は以下の通りである。
 - 【一】 国会図書館連歌合集23（以下甲と略す）・国文学研究資料館蔵『和漢聯句』（以下乙と略す）、【二】甲、【三】甲・乙、【四】甲、【五】甲・乙、【六】甲・国会図書館連歌合集36、【七】甲・曼珠院日録52。
- 三 甲と乙を用いて底本と対校を行い、その結果必要と思われるものを百韻の末尾に【校異】として「作者名」「本

文」「句上」で示す。

- 四 仮名遣いは原本のままとし、漢字は通行の字体に改め、また合字を開いた。
- 五 明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に（某か）と註記する。その他の事項は【備考】に記す。

〈翻刻〉

【一】

元和二年正月十二日

倭漢

- 1 梅さけは百木千草のかほり哉 式部卿宮
- 2 雪融風有和 太上天皇
- 3 文声鶯語滑 有節
- 4 鼓翼蝶胥過 集雲
- 5 しつかにも籬のほかの明はなれ 曼珠院宮
- 6 霧たちのこる月ほのかなり 平宰相
- 7 秋色山容異 古磧
- 8 鹿のなく音は遠近のみね 阿野宰相

9 雲やたゝさはれさそふ夕時雨
 10 木すゑ／＼そちりつくしたる
 11 風収林屋寂
 12 天杳故郷他
 13 別後嘆知少
 14 世のましはりにながらへぬめり
 15 奇観生童竹
 16 淡粧比女荷
 17 袖紅添色惑
 18 たのめてすすすよな／＼の月
 19 独のみをねぬ床は冷しな
 20 涙珠露若磋
 21 花に又そめはなさしの苔衣
 22 やまに入ては心のとけさ
 23 さす舟に春風あらきふもと河
 24 流従氷碎波
 25 市橋常競渡
 26 村野儘烹阿
 27 いつくにかうつす都の跡ならん
 28 任茂廟前莎
 29 奥ふかき岩ねつたひは物さひて
 30 雪はらひつゝ眠るをしかも

時直
 詮平
 友隣
 剛外
 永慶
 式部卿宮
 太上天皇
 有節
 集雲
 曼珠院宮
 平宰相
 古磻
 阿野宰相
 時直
 詮平
 友隣
 剛外
 太上
 式部卿宮
 集雲
 曼珠院宮
 平宰相

31 霜夜月陰冷
 32 家郷陽気難
 33 菊裳輕画袴
 34 かさしの袖のあやし舞人
 35 ものおもふ身はよそめにももれてまし
 36 いひやのかれむおほけなき中
 37 世惹虚名幾
 38 心つくしのさそなさすらへ
 39 奥津波しのくも遠き舟の上
 40 隔浦聴漁歌
 41 あしかきの程なきうちに枕して
 42 荻戸訝誰何
 43 とはぬをもまたるゝ秋の暮ことに
 44 眉月映微渦
 45 湖面霧欲粉
 46 山顛霞似羅
 47 送香花挑吾
 48 ひゝきにさはく松の藤なみ
 49 住吉やうしほに雨のましりきて
 50 雲くれかゝり行淡路渴
 51 嵐滴鐘自奚
 52 霜とけわたる杉の葉つたひ

有節
 太上
 古磻
 阿野
 時直
 詮平
 太上天皇
 式部卿宮
 曼珠
 有
 平宰相
 剛外
 詮平
 古磻
 友隣
 太上
 集雲
 時
 阿野
 曼珠
 太上
 平

53 神かきにおりゐつゝなく村からす
 54 あさ市たつや三輪の山かき
 55 袂連途絡繹
 56 鞋破棧嵯峨
 57 鵲叫蜀雲散
 58 国のさかひそかへりみらるゝ
 59 おもはすもひなの住居やもとむらん
 60 月孤令客哦
 61 ひく琴も秋のしらへは哀にて
 62 雁毎伴湘娥
 63 雖別床留影
 64 うつゝはかりの夢のはかなさ
 65 枕路華胥近
 66 瓊筵簪水苛
 67 かたるにもよはひにゆるせ物忘れ
 68 おもかはりせしいにしへの友
 69 何陋綈袍范
 70 已陳梯米坡
 71 快晴詩富景
 72 徂歲鏡慚皤
 73 うつし絵をうらみ侘たるおとろへに
 74 かたみの扇をきやらぬのみ

時 式 有 太 剛 集 古 友 曼 詮 有 太 阿 古 集 式 友 曼 珠 詮 剛 太 有 式

75 きぬ／＼の跡は閨もる月のうし
 76 感秋々思多
 77 みし花に紅葉の錦たちかへて
 78 ほとへつゝ入あふさかの関
 79 馴不及駒隙
 80 嬖求伸蛮窩
 81 柳糸将尺許
 82 ぬるみやそふる川きしの水
 83 わかあゆはつるにもれてやのほるらし
 84 いわの雫にもすそぬれけり
 85 おこなひやあかつきをきの室のうち
 86 燈点誦楞伽
 87 四扈鳥声一
 88 三祇蜉命俄
 89 すてさりし世をおとろくに涙落
 90 投棹備頭陀
 91 汲に猶あさからされや法の水
 92 つゝ井の底も月すめる影
 93 梧翻時雨若
 94 とひこむ袖や露かゝるらん
 95 患始壁聴蟀
 96 ならはぬものをよかれかなしも

時 太 曼 阿 太 集 古 時 詮 平 式 有 剛 友 阿 太 曼 珠 式 太 平 有 阿

- 97 あためくやくらの契かはすらん
 98 深隠花無信
 99 雅遊杏正配
 100 しらてくやしき人のいつはり

式 古 集 曼

【校異】

- 【作者名】 9・22・35・48・53・75・82時直―昭直（甲）
 【本文】 26烹―忘^{意カ}（乙） 85をきの―置^{置カ}の（乙） 89すて―すく（乙）
 【句上】

- （甲） 太上天皇 十二句／集雲 八／式部卿宮 十／古
 磯 八／曼殊院宮 十／平宰相 八／友隣 六／阿野
 宰相中将 八／剛外 六／昭直朝臣 七／詮平 七／
 有節 八／永慶 一
 （乙） 太十三句／時七／剛六／式十／有八／詮七／曼十／雲八
 ／永二／平八／磯八／阿八／友六
 【備考】 100句が97句と98句の間にあるとの指示がある。甲
 ・乙も同様。

【二】
 元和二年二月八日

和漢

- 1 池になひく柳は風のうき藻哉
 2 和晴鴨緑温
 3 朝霞なかれに雨もさそはれて
 4 すゑも田面やかへし初けん
 5 蘇奈野無草
 6 生疑雲有根
 7 山高勞待月
 8 秋のあつさの消のこる窓
 9 夜長さをおほゆる今朝の燈に
 10 経集快心繙
 11 遠寺鐘前導
 12 新正筵始蕃
 13 酌かはす霞に袖のわきはひて^{に兼}
 14 ましはりあかぬはるの夕鞆
 15 庭花宜日翫
 16 香こめにうへし梅のあはれさ
 17 雪はたゝ積るまゝなる山かくれ
 18 野を狩杖にまかせてそ行
 19 乗駒もなつめはしはしおり立て
 20 逢朋期月昏
 21 岩栖幽閣霧

曼 剛 阿 時 友 良 太 式 古 有 集 右 冬 剛 曼 通 阿 時 友 良

22 秋露結盈落
 23 色々になひきあひたる萩薄
 24 竹よりおくに残るあさかほ
 25 衰老迫^レ西日
 26 柔君得一坤
 27 常思寧爾屋
 28 あらしはたえぬ嶺の松の戸
 29 しくれぬる雲はしはしの半天に
 30 月寒^{シテ}厭^ニ断^ニ猿^ヲ
 31 夢覚る岩かね枕敷侘て
 32 こえん行衛もさ夜の中山
 33 鳴捨し跡したはるゝ郭公
 34 煙横埋某^ノ村
 35 紅晡繫蜚艇^一
 36 廟古欠^ニ機樽^一
 37 苔厚徑何処
 38 柴こり尽し奥に人山
 39 みる／＼も雪になるへき遠の雲
 40 簾為景佳掀^{カッ}
 41 色うすき紅葉のかたみ月出て
 42 愛菊毎窺園
 43 砌には秋の胡蝶のとひめくり

太上 式部 詮古 有集 右冬 剛曼 時阿 良太 古隣 友隣 式時 集詮 太右

44 霧の籬の日影しつけし
 45 一とおりの余波のひやゝかに
 46 かりねたのしむたひのやすらひ
 47 都をもわするゝ花にやとりして
 48 避漢人桃源
 49 霞際簇仙駕
 50 夕斜停雅轅
 51 同^レ帰知喜老
 52 藏道合呉孫
 53 あらそへる国のさかひのいかはかり
 54 さした柳のしけり木たかき
 55 翔集養雛鶯
 56 盟堅比翼鴛
 57 あはれ猶かたみの衾引かつき
 58 夢にもうとき人のおもかけ
 59 妍月幾貪看
 60 あたゝめ酒に時うつるなり
 61 いさなひや小鷹の野へにあかさらん
 62 携杖去来繁
 63 膠漆明朝諾
 64 鉄磁清昼婚
 65 垂こめて起臥わかぬもの思

冬曼 阿式 剛有 良太 古時 詮元 友阿 右集 曼式 有古 剛詮

66 例ならぬ身となれる悲しさ
 67 祈るをもうけかたかれや神慮
 68 すなほにあらぬ歌ははつかし
 69 微分荊生口
 70 端些粽弔魂
 71 いかにして罪にあたる人ならん
 72 声惑感琶湓
 73 底までも月かけすめる秋の水
 74 袖冷しくみるめかる暮
 75 篷窓如露ニ坐^{ヨルガ}
 76 文筆試年元
 77 深院待花屢
 78 旧林種杏屯
 79 佚遊童逐塊
 80 むまやのあたりはなちかふ暮
 81 袖にしも馴るやさるの声ならし
 82 巴峽水云々
 83 鍊字月胸杜
 84 秋の螢は宵の間のそら
 85 閃電借ニ光露
 86 そよきしつまる末の浅茅生
 87 ふりわたる里はことゝふ袖もやは

時 右 式 集 良 冬 太 曼 阿 剛 友 古 有 太 上 時 集 良 友 右 冬

88 遁忘世塵喧
 89 浦よりも明石の峰はへたゝりて
 90 在亡煙裏輪
 91 霜きゆる竹の末葉はかたよりに
 92 羊車侍籠敦
 93 ねたまるゝ人の心もかへりみす
 94 うつせるかたやなをうへつほね
 95 百智計棋戦
 96 生れ出しをいはふ行すゑ
 97 鶴のすや花咲をくの松ならん
 98 尋春客扣門
 99 騷談欣晷永
 100 造化任天言
 【校異】
 【作者名】 76 剛—友（甲）
 【三】
 漢和
 1 待鵬嫌夏浅

剛 式 有 阿 古 詮 冬 太 上 式 曼 集 有 古

2 若葉のいつちちりのこる花
 3 春草にまじる款冬句ひきて
 4 風暖透窓紗
 5 朧月陰晴外
 6 重山雲霧遮
 7 冷しく時雨ゝ空に雁鳴て
 8 野辺は色なくなりし秋茅
 9 庭愛折残菊
 10 なさけの酔の袂をそ望
 11 琴訝漏私語
 12 とけ行なかはうらみ些き
 13 へたつるも心へたてぬことはりに
 14 音書親又加
 15 似たるをもさすかに思ふゆかりにて
 16 なきか別の道はるかなり
 17 神遊雖楚越
 18 聖寿等嵩嶺
 19 松自嵐浮雨
 20 雲にまよひてゆくむら鴉
 21 月落るまぐらの夢もさむき夜に
 22 砧声入戸謹
 23 小倉山ふもとの里は霧こめて

照高院宮
 曼
 梅心
 秀賢
 有
 院
 泰重
 右衛門督

24 荒径雑跡麕
 25 にわかなる野分に花のしほれはて
 26 雲にはなるゝ日は斜なり
 27 帰樵肩不息
 28 弁士口成吧
 29 あまたにもたちそふけふの市の場
 30 田々同列蛙
 31 水やたゝ浅きかたよりぬるむらん
 32 かたへつのくむ中のかれ葭
 33 柳老絶糸念
 34 ふりつゝ門もかたふける家
 35 並影不孤月
 36 秋の夜にしも行なつむ驂
 37 独くらす山より山の下もみち
 38 わらふも袖の露は窪な
 39 疑蜀雨愁涙
 40 乱秦雲鬢了
 41 余粧閨妾衞
 42 擡手野僧叉
 43 しつかなる心とうるはまことにて
 44 逢勝思無邪
 45 はる／＼と岩のうへより落瀧津

令悦
 実
 照
 曼
 有
 古
 照
 院
 令悦
 右

46 檐高月有華
 47 風にちる露はさなから玉霰
 48 篠筵秋耐嗟
 49 浮生花薄命
 50 さへつる鳥のおりを差へす
 51 谷の戸も長閑き色に明はなれ
 52 とし越ぬらしまたき霞める
 53 水必知氷泮
 54 さゝれ岩間のなみの苴
 55 隱為避塵ト
 56 痒於隔壁爬
 57 好聴児詠杜
 58 なといたつらに人の誇れる
 59 あやなくも国は四にしわかれきて
 60 英主々兵車
 61 北南そことしもなき霧の中
 62 月沈迷海涯
 63 瀾狂漁袂冷
 64 日飲茗樽賒
 65 かりそめにいはふ旅居の神々楽
 66 くるゝまに／＼きこえぬる筋
 67 草かりや村より村にかへるらん

右 曼 照 令 古 梅 詮 泰 右 院 秀 古 令 照 有 院 曼 詮 梅 秀 実 有

68 呼喚渡頭鯉
 69 富士川や末もはるかに明過て
 70 ふゝきは雪を浪かあらぬ耶
 71 随群翔集鷺
 72 接衆倒拈蛇
 73 甘寂諳詩味
 74 禦秋擁破裳
 75 貧居招月樂
 76 もえてをくもや畚なるらん
 77 山かつも花さく陰に住かへて
 78 はるをよすかにかゝり衙る
 79 夜友期燈節
 80 世音瞻練圍
 81 小初瀬やいの行ゑはめぐりあひ
 82 固盟絶代佳
 83 施深顰淺笑
 84 劉八難三塗
 85 たまゝつる秋に程なくなりてけり
 86 ゆふへ／＼の月の夜は嘉
 87 のこりぬるあつさ忘るゝ外あるき
 88 例ならぬにそはらふ太麻
 89 誑丘由行詐

泰 右 実 照 詮 令 有 古 院 梅 秀 詮 曼 泰 古 令 悅 有 梅 心 院 実 秀

90 献卞 藺 求 瑕 古
 91 まつりことたゞせる心いかはかり 時
 92 苔むすつゝみいつか樋けん 曼
 93 なみたゆる松かね枕まところみて 右
 94 くるゝ浜路にかけてはす置 院
 95 霞際 鐘 紅色 梅
 96 はるもあらしの声や高砂 実
 97 満地 恨 花落 古
 98 窺園 对 杏 婷 有
 99 良辰 吟 興 幾 秀
 100 野へにかつなき秋をまつ巴 曼

【校異】

〔作者名〕 15 照高―賢(乙) 58 院―右(甲) 59 右―院(甲)
 〔本文〕 8 なりし秋茅―なりし秋(乙) 30 同―日(乙) 31
 かたより―かたはり(乙) 54 なみの茸―なみの(乙)
 74 擁―催(乙) 78 はるをよすか(以下欠)(乙) 89 誰―
 誰(「禱^寺」と冒頭に書人がある)(乙)
 〔句上〕
 (甲) 院御製 十句／有節 八／照高院宮 八／古磻 十
 一／曼珠院宮 九／梅心 九／右衛門督 八／泰重
 六／実顯 七／詮平 七／秀賢 八／令悦 八／通村

一
 (乙) 院御製^{十句}／有^八／通村^一／照高院宮^八／曼^九／磻^十／
 梅^九／右^八／泰^六／顯^七／詮^七／秀^七／令^八

【四】

和漢

1 萩の葉にきくはしかしや秋の声 入道大納言
 2 傍庭 鳴露虫 集雲
 3 鈎簾 憐月落 秀賢
 4 梅のにほひにめさましてけり 昌琢
 5 若草を引結ふ野のかり枕 色
 6 はらふかすみの衣手のしも 云
 7 景自 晴嵐聚 古磻
 8 日於 潤戸終 友竹
 9 岩ふるゝ水の流は音すみて 東
 10 且 漣池面濃 听寂
 11 萍開 魚可数 靈圭
 12 雨過るなり小田の末／＼ 玄仲
 13 芦のやの道分出る袖みえて 元通
 14 松原とをく夜は明ぬめり 入道大納言

15 閃々栖鴉散
 16 開々霜鶻狎
 17 はるかなる交野の御野も冬枯て
 18 ところ／＼にすゝきそよめく
 19 とひ絶る露の故郷秋さひし
 20 良朋月入櫳
 21 花時吟興異
 22 鳥の音かすむ山しつけき
 23 春寺雨濡耳
 24 曉楼星照躬
 25 袖に猶さゆる砌の小夜嵐
 26 独臥夢醒空
 27 今朝までも古き枕をそはたてゝ
 28 軒もる露のしけき葎生
 29 促織続愁緒
 30 すてし世思ふなみた身にしむ
 31 月こそはなきかかたみとむかふよに
 32 慰寂屢彈桐
 33 信手草書楷
 34 滌煩茶舁功
 35 とふ人にうきも忘るゝ柴の庵
 36 いく暮ことに雪つもる山

集雲 秀 昌琢 色 云 古 友竹 東 友竹 玄仲 集 入道 昌琢 秀 云 色 友 古 寂 東 玄仲

37 傾蓋松高秀
 38 用兵枰互攻
 39 袖あまたはふのうふやにあつまりて
 40 天津日つきをあふかぬはなし
 41 歌にこそあらはす国の神心
 42 勦酒儼商彤
 43 園深有馴雉
 44 かすみのまかき山かけてけり
 45 池ひろき島根にはるの瀧落て
 46 松のひゝきや花さそふらし
 47 鵲啼驚蝶夢
 48 鶴潔賤鷄翁
 49 月豈仙遊翫
 50 秋のけしきもさそ水無瀬川
 51 積霧瀑何在
 52 体空道正中
 53 卷々のつたへかしこき人こゝろ
 54 合てみるもいつれうつし絵
 55 夢のうちの姿はなをもたゝならて
 56 巫雲変任風
 57 離襟猿譲涙
 58 雅曲鳥余工

圭 古 昌琢 入道 云 秀 集 色 東 東 友 听 集 昌 秀 古 入道 玄 云 友 听 集

59 長閑さや春の御前の庭ならん
 60 登閣月朦朧
 61 きく残る雪のまかひの嶺高ミ
 62 継尾の鷹の跡ちかき空
 63 徴袂洞将絶
 64 富文韓送窮
 65 進難燈稍親
 66 内外のまもりしるき九重
 67 苔鎖辺亭鼓
 68 樹懸陽谷銅
 69 命斉崑路露
 70 望断隔村霧
 71 月ほそき夜は入ふす床のうへ
 72 さはりあるやとまつかくるしき
 73 袖はたゝ涙に雨にしほりきて
 74 あはすなからのかへるさはうし
 75 閑はいつ吾通路にすゑつらん
 76 靄遮雨又東
 77 尋花鞭馬幾
 78 今こそさかめ井手の山吹
 79 氷しもなかる末のふか緑
 80 催耕民屋忽

色圭東昌古秀友云集古圭听昌入道
 集入道

81 乱街妨歩柳
 82 旅のわかれををくる悲しさ
 83 かきりある二の位にさたまりて
 84 班立列卑崇
 85 幾闌弟兄笋
 86 利交難講好
 87 恩義每存忠
 88 となりもふりてあはれあら垣
 89 あやしくもにるまいりより時めきて
 90 坐湘叫月鴻
 91 秋のみつちかき真砂の霜をうすみ
 92 うつろひやらぬ菊はいくもと
 93 冷しき人日かくれに飛こてふ
 94 時雨しあとの野は静なり
 95 藕やつかねをきつゝ帰るらん
 96 渡暮已維嗣
 97 古籟鷗移宿
 98 新銘雀賀宮
 99 花の木も竹の園生に殖ませて
 100 群卉迎春同

听東云圭古集秀玄色友昌入道
 集色古圭秀東云玄仲

【校異】

【本文】 4 梅のにほひ―梅にほひ（甲）

【句上】 入道大納言 八／古澗 九／集雲 十／友竹 八

／秀賢 九／東 八／法橋昌琢 九／听叔 七／色

八句／靈圭 七／法橋玄中 八／云 八句／元通 一

【備考】 88句が85句と86句の間にあるとの指示がある。甲も同じ。

【五】

漢和聯句

1 竹密雪 宜聴

2 冬木なからの軒の梅か香

3 鶯は春まつ宿に鳴よりて

4 簾前風 不狂

5 雲収山 近侍

6 霧散月 全彰

7 くる鴈の翅つらなる数みえて

8 田面色めくみなと江の方

9 波かゝる芦のはつたひそよくらし

10 潮盈映夕陽

11 むら鳥の鳴たつ末の山晴て

集雲

入道

云

古礪

友

圭

色

紹由

慶純

有節

昌琢

12 たか根おろしやすむ片岡

13 鐘揺雲 八裂

14 月かけすめる明かたの霜

15 橋危難進履

16 景美好重觴

17 送祖疊歌曲

18 袖もあまたのたひの装ひ

19 はるかなる国まもるへき司にて

20 感時土弄章

21 よもすからまとゐしてみる花のかけ

22 善草むしろしきあかぬ床

23 春夢化成蝶

24 露にしたかふ世は無常

25 身を秋と法のつとめはをこたらて

26 こゑも野寺にちかき聲

27 林自霧晴浅

28 夜依月朗良

29 夏しらぬ闇の樞はさしやらて

30 羞明螢入囊

31 面かけををしもよしある物こしな

32 悩寧屏後娘

33 調新調宴席

昌儀

听叔

元通

古沼

集雲

靈圭

云

紹由

友

儼

色

集雲

慶純

云

昌琢

友竹

听叔

色

古礪

昌琢

集

听

34 補落繫慈航
 35 御熊野や浦の浜風吹出て
 36 まつたつ陰そ秋に涼しき
 37 偃露空階草
 38 ところ得かほになく蛩
 39 さしうつる月に枕の夢絶て
 40 砧切旅懷傷
 41 行吟千村路
 42 ふりつゝ雪の山茫なり
 43 かせの音時雨しくれし夜は明て
 44 すゑ集みたるゝまとのくれ篁
 45 隠為鳥群聒
 46 晷於駒隙忙
 47 卷々をいかてか字ひつくさまし
 48 かえらん衣すくる大唐
 49 故園花恙否
 50 かすみをはらす風の松牆
 51 鴨音鶯友語
 52 ひとりことさらひくも日長き
 53 避世易安亮
 54 興廷權釣姜
 55 底清き水や石間に残るらん

竹 昌 紹 古 色 慶 听 集 云 紹 昌 友 古 色 儂 集 慶 听 紹 古 色 琢

56 裙紅銜色鶯
 57 浅からぬ谷の木すゑ霜解て
 58 夕僧拾葉黃
 59 とふ人もなき室の戸の秋さひし
 60 月にむかしをえやは忘れむ
 61 倦官多帰思
 62 極妍幾淡粧
 63 ほのみにさそな心のうかれ妻
 64 すめるはたれか奈良の故郷
 65 鵲從藤茂宿
 66 あまつゝきをし山の傍
 67 経嶮暫留撞
 68 截流何淬鋌
 69 争雄軍水信
 70 いさこの道のそての旁
 71 北まつり催す比やしるからん
 72 森の木陰の塵攘なり
 73 はるくさをおもけに埋む花くちて
 74 蛙栖老龐塘
 75 浴鳧知水暖
 76 水きえての波のしら琅
 77 月なから志賀の渡の明はなれ

集 友 儂 慶 云 古 听 紹 昌 友 集 古 听 儂 云 色 琢 集 古 儂

78 雖秋松尚蒼
 79 置霜も霧の雫にさそはれて
 80 日かけさやかにもる板廂
 81 暑さたゝせはしき家は堪かたみ
 82 木こりの袖のならす川梁
 83 山市平何立
 84 古叢衆以匡
 85 別しはとをき仏をおもひいて
 86 野辺のすみれそつみ搶ぬる
 87 駟春童六七
 88 こなたかなたにはなちかふ驕
 89 好術瑤池穆
 90 寄生鐘阜王
 91 くもらしな月に心の松の風
 92 遣興屢吟商
 93 きけはたゝなれも友なふ虫のこゑ
 94 抱孤涙万行
 95 艶詞親見妾
 96 こりすたのむやつらき伴
 97 簪花疑退老
 98 綰柳覚回腸
 99 長閑にも酔をすゝむる名残あれや

友慶云色昌集听听儼友色古集琢听紹友听色古集云

100 いくかへりかはうたふ朝衾 琢

【校異】

「作者名」 57 友—儼（甲） 58 儼—友（甲） 76 紹（甲・乙）
 「本文」 32 娘—始^{チマ}（乙） 45 群—声（乙） 50 かすみを—
 うみを^{ミカ}（乙） 61 婦—^{ヒメ}（乙） 95 詞—調（乙）

【六】

元和三年正月廿一日

和漢聯句

1 きくの千世やうち払ふ露の玉柳 照有
 2 風温 雨 後 春 曼右
 3 鳥の音も日影も釣簾捲て 三太
 4 くるゝやおほふ軒のむら筠^竹 集古
 5 川つらや舟は岸ねの傍に 時
 6 静処 獨 垂 綸 忠定
 7 薄好照 蓑 月
 8 采弥賞 薺 晨
 9 隙もなき露のしめゆふ籬にて
 10 いくへか野辺の霧まよふらし

11 笛一樵還牧
 12 交連君与臣
 13 かしつゝやおなし同胞かはるらん
 14 のほる位は才の程く
 15 高築絵蘇閣
 16 とをきもさらに忍ふいにしへ
 17 くらりての世に生るゝを恨にて
 18 おとろへきてのつかへ身にしむ
 19 タレ月退朝幾
 20 霧山起霧頻
 21 管窺花隔穀
 22 杯視杏訛レ帘
 23 旅行をいさむるよるの伴ひに
 24 つはさはなれす雁かへる声
 25 娥英琴互答
 26 あとをしたへは涙かなしき
 27 山階の宮のあはれを問よりて
 28 草木もかるく庭の露霜
 29 すそもたゝ野分の後の月さひし
 30 支枕近聴磨
 31 寢筥夢難統
 32 開奩眉已顰

友竹
 剛外
 詮平
 言諸
 有節
 照高
 右衛門
 曼殊院
 太上天皇
 集雲
 古礪
 友竹
 忠定
 三級
 剛外
 時

33 顧施陰水柳
 34 棹さす舟そのとめかねたる
 35 雪融春溜漲
 36 齡暮歴年陳
 37 ひたすらにねかふこそたゝ仏なれ
 38 洞欵戴島巾
 39 夜寒蜚閉口
 40 いろもてやつす浅茅生の月
 41 置程もあらてや露の散けらし
 42 淡涯修幻因
 43 別しをいかに尋ん道なれや
 44 墳古不名人
 45 孤独野廬者
 46 草ものへふすかけの松かき
 47 我屋峰屏擁
 48 はこふ真柴はとをからぬ山
 49 花の枝はにけなき袖も折かさし
 50 踏舞酌霞醇
 51 消日永言友
 52 候門講好賓
 53 かくれかにひとしき心浅からて
 54 またかえぬるも篠のかり葺

太上
 古礪
 照高
 詮平

55 おく深く枯木の道やもとむらし
 56 瘦筇衝雪辛
 57 たか人はたゝとさけひをしるへにて
 58 明てはるけき末の草むら
 59 甌水客衣湿
 60 迎春品物新
 61 有嘉棠絶恨
 62 入蜀菜甘貧
 63 はれてたに雨の朝の月うすみ
 64 わかれて後の涙すさまし
 65 むき捨る中の衣も打かさね
 66 ことりつかひもいさみある程
 67 相夜多へ最眞
 68 清政已寛仁
 69 めくるあれは又立かへる国司
 70 かふるも広きすゑの千町田
 71 村鼓風^レ零^シ聒^シ
 72 棚書鑑古掄
 73 燈は月より後にかゝけそへ
 74 なかき夜すからとのゐする人
 75 暢童虫近室
 76 翦翼蝶過隣

曼 友 右 忠 有 集 剛 古 時 三 詮 右 古 太 上 照 曼 集 剛 忠 時 友 有

77 紅為花零爛
 78 たもともかほる梅のした風
 79 鶯勝昭二弄
 80 鸚随楊太真
 81 きくに猶そのもろこしや思ふらん
 82 易地睿台均
 83 胡說溪彈舌
 84 あたりにちかきとり／＼のこゑ
 85 つくりなす砌は広き野を分て
 86 瀑飛山挂紳
 87 横雲は音羽のみに消残り
 88 鵬叫雲晴辰
 89 うつゝかとしたふはかりの今朝の夢
 90 とゝめかねたる袖のうつりか
 91 隻臥月知己
 92 世をのかれての秋のあはれさ
 93 婦計思鮎翰
 94 妙姿相馬歎
 95 従追奔電晷
 96 花の梢にいりし在あけ
 97 雲霞はるゝかたより山みえて
 98 のちのやよひははるとしもなし

太 上 照 剛 外 集 曼 古 有 詮 三 級 太 上 右 衛 門 友 林 照 曼 有 節 時 直 古 剛 集 右 時 詮

99 咲藤の浪にしつえやひたすらん
100 禁池 潏 泛 輪

照 有

【七】

和漢 第六

- 1 孤円空裏月
- 2 衣手さむし秋風の床
- 3 旅枕奈宵永
- 4 たゆたふ舟は波の方々
- 5 蘆雨驚鷗睡
- 6 樹陰囀鳥吭
- 7 朝つく日霞の隙にもれ初て
- 8 よるは絶くふる春の霜
- 9 長閑さもいたらぬおくの山里に
- 10 松のこゑにもなるゝ片岡
- 11 秣嘴営巢鶴
- 12 銜仁瑞世鳳
- 13 まことあることはゝ文の内にして
- 14 佳期弥断腸
- 15 二道はみはてしものを我恨

有節 日大 英 聖 清 新三 右督 前左 広 清秀 有 日 英 聖

- 16 儒其異老莊
- 17 雪窓呵凍硯
- 18 明わたりたるかけのむら篋
- 19 蚊の声や風に方より残らん
- 20 月出る夜のはしる涼しき
- 21 花にみし梢は露の若みとり
- 22 松にうつろふ藤は芳し
- 23 池頭霞又雨
- 24 節序旦兼望
- 25 緇礼興三代
- 26 宗門空八荒
- 27 木かくれの道は往来の絶やらて
- 28 神の祭の馳の粧本ノマハ、油ウ
- 29 舞姫のかさしにかくる玉かつら
- 30 月にいくたひ酔の觴
- 31 夜寒難語戸（音ウ）
- 32 秋浦明浮鯉
- 33 瀟霽雁行画
- 34 水そけふりのひまを彰ス
- 35 竹はたゝなかれの末に方よりて
- 36 費杖果竜翔
- 37 半空の雲はみるく雨そゝき

清 新三 右督 前左 広 日 有 英 清 新三 日 聖 英 新二

38 ともに別となるまりの場
 39 期再会花後
 40 弥生くはゝる空の日長さ
 41 高野山春は分ての法のこゑ
 42 風鈴 勉 禿 当
 43 甕 徒 林 罅 見
 44 世為隠深忘
 45 愛着山閑味
 46 人はなれての妻こふる響
 47 霧籠る田面の廬のかけさひし
 48 映水月清光
 49 川風は浪のよりもを吹分て
 50 堤際絮顛狂
 51 翠燦蝶児舞
 52 日はあたゝかにうつる草墻
 53 隔簾霞一縷
 54 治国道三綱
 55 周末法衰孔
 56 夢にかよふはちかき唐
 57 そのかみもさとりをうるはまれならし
 58 をろかなからも住は尋常
 59 かつならぬ親もあはれむ心にて

前左 前左 右督 聖 有 日 英 前左 有 前左 英 広 日 有

60 中のちきりを人の妨（待ち）
 61 寵露吁難特
 62 新秋亦耐傷
 63 年ふれは月にむかふもはつかしみ
 64 とり出て今うつ衣箱
 65 枯篋伝鉢霏
 66 朝なゆふなに行かへる廊
 67 鐘響屏塵雜
 68 あつまりにたる市忙し
 69 村々橋廿四
 70 世々寿無疆
 71 いつでも咲色は同じ春の花
 72 砌のうちにひく青楊
 73 霞被風勾引
 74 秋其暑傲装
 75 影すめは月の都もみるはかり
 76 浅茅のおくはなく蟬
 77 清潔露全壁
 78 雅瑩水大簣
 79 夏はたゝ扇を絶す手にならし
 80 契りしを待ふかす傍
 81 面膩斑々涙

広 清 日 右督 有 清 新三 有 前左 広 英 清 聖 右衛門督 有 新三 日 有

82 かたみのきぬに残るうつり香
 83 折花風擺去
 84 落杏雲飛颺
 85 立よれはさえつる鳥の驚て
 86 以畋渭水陽
 87 声さえし波もしつまる浜つたひ
 88 祖餞艇千将
 89 しはしたゝしたふ情の名残あれや
 90 後の朝の露の玉章
 91 交遊無月若
 92 秋にいかにおもふ故郷
 93 分て行野へは狐の栖にて
 94 草緑石麟葦
 95 絶筆硯生蘚
 96 窓には塵の猶うつ卯シ
 97 九光瑩的礫

前左 英 清 聖 有 右 廣 前左 清 聖 前左 英 日 有

98 吹とをりたる池のさ夜
 99 あれまさる板間は霜のふり入て
 100 明はつるまで星の煌ッ
 新二 廣 右

御 十三句

聖護院准后 九 新三位 八
 前左大臣 十 有節 十二
 日野新大納言 九 清斎 十一
 広橋中納言 八 英甫 十一
 右衛門督 八 清原秀賢 一

【校異】

「作者名」 89 広―前左（甲） 90 前左―広（甲）
 「本文」 7 霞―霜^{露也}（甲） 96 うつ卯シ―うつ仰シ（甲）

（よう） こんほう・日本学術振興会外国人特別研究員）